

## ほとんど知らない オーケストラの話



(第6回)

### 指揮者とは、その一

東京フィルハーモニー交響楽団  
専務理事・楽団長

石丸 恭一

舞台いっぱいには楽員が並び客席に向かって繊細で壮大な音を奏でます。その中にただ一人客席に背を向け、一音も発さず、最後まで呪術師のように腕を振っている、その人が指揮者です。

団体競技の野球やサッカーに指揮をする監督が居るようにオーケストラにも指揮官は必要なのです。野球やサッカーの監督の報酬はトップクラスの選手より安いそうですが、オーケストラの一流と言われる指揮者の報酬（ギャラ）は全楽員のギャラの合計より高いのです。

スポーツが試合をするために行う練習は長期間に及ぶと思います。オーケストラは公演毎にその練習を行い、公演時間2時間の演目に対して通常は8時間の練習を2日間に分けて行います。公演が立て込んで来ると2、3時間の事も少なからずあります。指揮者はその練習と本番の時間（3日間程度）が勤務時間なのです。

公演に対して楽員が持っている譜面はそのパートの音しか書かれていません。管楽器や打楽器は一人ひとりが違った音を担当しますので夫々に書かれた楽譜を持ちます。弦楽器は人数ですが楽譜は5パート（第一ヴァイオリン・第二ヴァイオ

リン・ビオラ・チェロ・コントラバス）です。オーケストラには約40種類の違った音が書かれた譜面があり、演奏中に他の楽員の譜面は見ることは出来ません。

全ての音が書かれている楽譜は総譜（スコア）と言ってそれは指揮者だけが持っているのです。オーケストラからは大体40種類の違う音が重なり合って出て来るわけでスコアを見ている指揮者はそれを良い音、良い音楽になるように調整しなければなりません。そのためには曲の全てを理解していなければならないのです。例えば次の公演の指揮者の前に譜面台が置いて無かったとするとその指揮者はスコアの総てを暗記（暗譜）しているのです。

その曲がベートーベンの第五番「運命」であれば全曲35分の中に1,566個の小節があり、奏者が出す音の数（音符）は51,327個あります。指揮者はその中の一つの音が違ってても正さなければなりません。80人を超えるアーティストを相手に音のチェックは当り前の事で、音楽そのものまで自分の手中に収めたい指揮者とオーケストラの名誉を賭けた戦い、持ち時間は5～6時間です。